

沖縄の軍事基地と地域社会 (2)

—浦添市における自治会と郷友会—

関西大学 栄沢直子

1 目的

沖縄県浦添市は、昭和 30 年代の米軍基地の移駐、昭和 40 年代後半の那覇市のスプロール化によって、人口が急増した都市である。浦添の都市化については、量的質的ないし巨視的微視的にとらえる必要があるが、本報告ではとくに、「行政的な区域の単位でもある地域組織、すなわち自治会」(浦添市史編集委員会 1987: 158)と、「故郷を離れ浦添に移り住んだ〔中略〕同郷人の組織である郷友会」(同: 156)に焦点をあてる。高橋(1995)によれば、那覇市には自治会と郷友会の二面性をもつ組織、つまり「郷友会型自治会」が少なからず存在しているという。また浦添市にも自治会と郷友会(地主会)が相並ぶ「二重組織型」に分類される自治会がみられる。本報告では、「郷友会型自治会」や「二重組織型自治会」を取り上げ、とくに「二重組織型自治会」の事例研究を通して、自治会と郷友会が相並ぶ意味や、自治会から郷友会を切り出す意義について考察することを目的とする。

2 方法

浦添市史編集委員会(1987)によれば、浦添市の自治会は、成立過程や新旧住民の関係から、①新住民型、②新村落型、③解体型、④地元型、⑤二重組織型に分類されるという。とくに⑤二重組織型は、新住民と旧住民からなる自治会と、旧住民だけで構成される「共有地地主会」などの組織が相並んでいる。本報告では、⑤二重組織型に分類される字宮城と字小湾の自治会と郷友会(地主会)の役員を対象としたヒアリング調査の結果を分析する。

3 結果

高橋(1995)は、「自治会と郷友会は、形態的には異質であるにしても(特に成員性における形態的異質性)、その機能は基本的に等価である(機能的等価性)」(高橋 1995: 160)と述べて、自治会と郷友会の形態的異質性と機能的等価性を指摘した。本報告では、この命題を手がかりに、自治会と郷友会の組織構成や機能分担を分析する。まず自治会と郷友会の形態的異質性については、字宮城では成員性に重なり(同質性)がみられ、字小湾では成員性に隔たり(異質性)がみられた。両字の異同は、「浦添市宮城共有地等地主会」と「浦添市字小湾郷友会」という名称にもあらわれている。つぎに自治会と郷友会の機能的等価性については、字宮城、字小湾ともに、自治会が敬老会を催し、郷友会(地主会)は敬老金を配るといった機能分担がみられた。

4 結論

自治会と郷友会の機能や力量は必ずしも「等価」とはいえず、郷友会は自治会の「スポンサー」として、字の年中行事を「援護し下支え」している。また郷友会と自治会のあいだには、委任=受任関係がみられる。その財源は字の共有財産に支えられており、とくに共有地が米軍に接収されている字では、軍用地料が郷友会の主な収入源となっている。逆にそうした財政的基盤が郷友会(型自治会)の凝集性や「家郷志向性」の強さの源泉にもなっている。軍用地の存在は字の存立に影響を与え、また返還が日程に上ることで、字と地域のつながりに再考を迫っている。自治会と郷友会の形態的異質性と機能的等価性という命題には、検証や反証の余地があるが、その実証には沖縄を網羅した「地域アソシエーション」調査が必要である。

文献

浦添市史編集委員会, 1987, 『浦添市史 第七巻資料編 6 浦添の戦後』.

高橋勇悦, 1995, 「都市社会の構造と特質——那覇市の『自治会』組織を中心に」山本英治・高橋明善・蓮見音彦編『沖縄の都市と農村』東京大学出版会, 179-220.